

したいことをできなかった人、
何か欲しいものを手に入れることができな
かった人は、誰々のせいだなどという。
あるいは、運が悪かったとも言う。
実際には、誰かのせいなどではない。
しかし、運が悪かったというのはまさしく事実
だ。



その悪い運とは、自分が本当はそれを欲しがらなかったということだ。
欲しいという希望を持つだけでは何事も変化しないし、何事も起きることはない。
夢想するだけでなく自分の指一本を動かしていれば、
思うだけでなく積極的に行動していれば、確実に得ることができたのだ。
なのに、多くの人は怠惰なまま、安穩と座ったままでいて、
いまだにぼんやりと夢想しながら、他人や運や星のせいだと不思議な不平を口にする。

——アラン『幸福論』※

※アラン(Alain)ことエミール＝オーギュスト・シャルティエ(1868～1951)…フランスの哲学者、評
論家。アランはペンネーム。『幸福論』は1925年に著された。ベルクソンやヴァレリーと並んで
合理的ヒューマニズムの思想は20世紀前半フランスの思想に大きな影響を与えた。



世界放浪のため萌学舎を一時休職している
國吉先生から届いたみんなへのメッセージ

文・写真: 國吉真人

背負ったバックパックをそこかしこにぶつけながら、狭いバスの通路をどうにか抜けて、大通りへと降り立った。肩からずり落ちかけたマンドリン（バイオリンとギターの合いの子のような楽器）を、背負いなおす▼通りの両端は、たくさんのバスがバラバラな方向に好き勝手に並び、その隙間を車が埋め、さらにその隙間に屋台が詰まり、残ったわずかなスペースをガヤガヤと人が行き来していた。屋台では、パンを丸めたみtainな食べ物が焼かれている。燃料に使われているのは、見覚えのある、そう、牛糞。牛の糞を乾かしたものに、パンを直に置いて、焼いているんだ。当たり前のようにそれが売れていく。黄色く透き通った甘そうなお菓子には、蜂のような虫が50匹くらい群がっているが誰も気にしていない。その後ろでは男たちが5人くらい、2mくらいの等間隔に並

んで立小便をしている。自分はサンダルを履いていたが、通りの隅を流れる下水に絶対に触れないよう、細心の注意を払って歩いた▼そんな通りを抜けた先、ターミナル駅の広場では、まるで空から落っこちてきたような感じで、何人かの人間が寝転がっていた。蠅がたかり、目蓋の上を好き勝手に這っているのに、微動だにしない▼これは、まさか……いや、いまピクってした。まだ、生きている。そう、今はまだ。すぐ横を、スーツや綺麗なサリーで着飾った身なりの良い家族が通った。はしゃぐ子供と、その手をひくにこやかな両親……▼新しい土地に着いたら、まずは宿探しだ。暗くなってからじゃ遅いし、重い荷物も置きたい▼ネパールに比べると、物価が高かった。多少良いなと思えるホテルは、ネパールのホテルの4倍くらいした。安い宿となると、扉もないような真っ暗な掘建小屋にベッドを詰め込んで雑魚寝するような、外で寝るのと大差ない、部屋ともつかない部屋。ここに泊まったら、多分朝までに全ての荷物が奪われているだろう▼3時間ほどかけてやっと見つけた安宿は、湿気でベッドのシーツがじととしていた。部屋の中のカビだらけのバスルームには天井がなく、そこから湿気がたまるんだろう。携帯用のビニールシーツを敷き、体を横たえる。——**とんでもないところに来てしまった。**それが、その時の感想だった。ネパールから、悪名高いスノウリ国境を無事に越え、インドに来た初日のこと。ゴラクプルと言う、観光すべき場所は何もない、自分にとってはただ交通の要所であるだけの街▼これからやっっていけるんだろうか▼インドからネパールに抜けた旅人は、まるで天国に来たようだと言っている。ネパールを愛するようだ。とすると、自分は天国から地獄へと落ちて来たわけだ。天国に戻りたいと思ったが、もうビザの期限はいっぱいだった▼こう書くと、インドはよくある噂の通り最悪な国で、絶対に行くべきでないと言いたいように見えるかもしれない▼でも、実際は、そうじゃなかった。インドには3ヶ月いたが、本当に楽しかった。良い部分も嫌な部分も、新たな自分を見つけられた。また行きたい。訪れたい場所が山ほどある。腹がたったことも含めて全てが大切な思い出だ▼と言っても、説得力がないだろうから、何がよかったのか書きたいと思います▼が、その前に、インドで感じたネガティブな思い出を全部書き出してから、思い残すことなくインドの良い面を書いていきたいと思います。

☆インドでのネガティブ・メモリー☆

「外国人専用列車チケット売り場」に行ったら、英語なのは表の看板だけで他は全部ヒンディー語(नमस्ते みたいな)、お客さんもインド人しかいなかった。チケット買えず▼インドでの2時間の遅れは誤差の範囲内。ある人は予約した列車が32時間遅れていた。



▲可愛い犬もいる

……これは「遅れ」っていうんだろうか?▼寝台列車に乗って迎えた朝。3段ベッドの最上段で目覚めた瞬間、自分の頭のすぐ横に誰か座っている。ぱっと目線を上げる。見知らぬインド人と目が合う。ここはボクの寝台席で一人用なんだけど、君はダレなの?



▲寝台席、ここに横になる

▼聖地ヴァラナシに着いた当日、雨上りの爽やかな天気。地面は乾いた牛の糞が雨のせいで溶け出してぐちゃぐちゃ（ヴァラナシでは牛が街中に大量にいる）。もう本当にぐちゃぐちゃ、靴が滑る滑る。史上最悪のスケートリンク。ガラガラ引くタイプのスーツケースを持った旅行者が悲鳴を上げていた



▲ヴァラナシではどこにでも牛がいる

やる」と言って、自分の旅行会社まで連れて行き、高いチケットを買わせようとする（もちろんチケットカウンターは廃止になんてなっていない）▼夜、ホテルに帰る道を歩いていたら、6匹くらいの野犬に後をつけられた。もうぎゃんぎゃん吠える吠える。この時ばかりは狂犬病が本当に怖くて、10メートル歩いたらカバンを振り回して怯ませ、また10メートル歩いたらカバンを振り回し……と繰り返して、通りかかったトゥクトゥク（三輪タクシー）に値段を聞いて、命からがら乗り込んだ▼そのトゥクトゥクは、乗った瞬間に値段が倍に跳ね上がった。すぐに降りるフリをしたら当初の値段に戻った



▲トゥクトゥク(三輪タクシー)。交通の要

▼そのトゥクトゥクから降りるとき、細かいお金がないからお釣りを出せないと言われた。「じゃあお金を返してくれ、明日お釣りを持ってきたらその時に運賃を払う」と言ったら、すぐにお釣りが出てきた▼食堂でチャパティ（薄いナン）をおかわりしたら、



▲天井！？？

バサッと投げてよこされた（ただ、これは文化の違いで、すぐに慣れました）▼ジャパニーズレストランで天井を頼んだ。どんぶりじゃなかった。天ぷらでもなかった。何か得体のしれない揚げ物が、ご飯の上で得体のしれないあんかけソースと和えられている。味はそんなに悪くなかったことにむしろイラッとした▼タクシーの運転手が道を間違えてグルッと余計な距離を走ったのに、メーター通りの運賃を請求された▼携帯電話をスラれた。ポケットに入れてから1分たさないうちに盗んでしまう鮮やかな手口にむしろ感動した▼スラれた携帯電話を探していたら、何人かのインド人が、「探してるのはコレか？」と自身の携帯をヒラヒラさせてカラかしてきた。ガンジス川にぶん投げてやろうかと思った（ただ、親身になって探してくれるインド人もいた）▼ある都市の宿。「一泊いくら？」と聞くと、「いくら払うんだ？」と聞き返される。ポツタくる気満々だ▼ある人に道を聞く。北にまっすぐだ、という。着かない。別の人に道を聞く。南の角を曲がれ、という。着かない。別の人に聞く。こっちじゃないから、戻って右手だという。着かない。別の人に…（以下略）▼まだまだたくさんあったけど、多すぎて忘れてしまった。話すとき長くなるので割愛したものも多い。まあ本当に、いろんなネガティブ・メモリーを刻んでくれました。

☆インドのよき思い出☆

さて、ここからがインドの良いところだ。ネパールよりは高いとはいえ、日本に比べれば物価はずっと安い。だいたい5分の1くらいに考えるとちょうどよい▼例えば、食事は一食100円~150円くらいだし、宿代も1000円くらいでそれなりのところに泊まれる。タクシーは30分強乗っても500円~600円、値切ることできる▼月5万円あれば、衣食住含めて十分に生活できるのがインドの物価だ▼次に、インドは広大な国だ。面積は3,287,590km²、日本の9倍くらいある。その広大さから、インドには同時期に様々な季節が混在している。北部では吹雪が吹き荒れる一方、南部ではジリジリとした陽射しの下で海水浴が楽しめたりする▼インドは鉄道が発達しているので、そういうさまざまな文化や季節のあるところに、列車で行くことができる。それも、インドの端から端まで行っても、列車代は数千円で済む（その代わり時間はかかる。西の海に接したプリーと言う町から、東のパキスタンとの国境あたりのジャイサルメールまで約40時間）。ひとつの国の中で同時期に、いろいろな文化、季節を巡れるというのは、とても面白い。加えて、魅力的な街が本当に多い。実際に行った街について、写真を交えて紹介したい。

聖地ヴァラナシ

ヒンドゥー教の聖地であるヴァラナシでは、ガンジス川で夜ごと祭式が行われ、賑やかな音楽とともに着飾った男が儀式の舞を踊る。川沿いに並ぶ洗濯物の風景はどこか旅人をほっとさせ、美しい朝日を見るために旅人は何日も足を止める。



▲毎晩の儀式



▲ボート漕ぎのおじさん



▲ガンジスから望める朝日

楽園ゴア

昔ポルトガルの植民地だったゴアと言う町は、乾季には毎年多くの西洋人が訪れ、パカンスを楽しんでいる。暑い日ざしと砂浜はまるでハワイにでもいるかのようで、インドの喧騒けんそうに疲れた旅人にとっては天国のように感じられる。



▲リゾートビーチ



▲ビーチ沿いの土産屋



▲ミュージシャンとセッション

漁村プリー

漁村プリーは、十数年前はゴアのように栄えたリゾート地だったが、今はすたれてしまっている。しかしその分、人々は親切で、温和な性格に心が癒される。広々としたビーチ、のんびりとした雰囲気はやみつきになるかもしれない。



▲波打ち際で遊ぶ子供



▲漁民の村



▲のどかな街並みが続く

秘境ハンピ

一昔前は知る人ぞ知る秘境だったハンピは、いまではずいぶん多くの旅行者が訪れるようになったが、それでもまだまだその神秘的な輝きを保っている。ハンピは、遺跡の中にある町だ。巨岩が街を取り囲み、町を歩くと歴史ある遺跡が当たり前のようにそこにたたずんでいる。



▲遺跡と巨岩に囲まれる街



▲道路の両脇にも巨岩



▲楽器を持ち寄ってセッション

砂漠の町ジャaisalメール(ゴールデン・タウン)

砂漠の町ジャaisalメール、別名ゴールデン・タウンは、大きな城塞を中心としてできた街だ。夕暮れ時に街は黄金色に染まる。また、音楽の町としての一面もあり、インド人も、ヨーロッパ人も、数は少ないけど日本人も、たくさんのミュージシャンが毎晩どこかでコンサートを行っている。



▲楽器を弾く子供たち



▲夕暮れ時の街並み



▲ラクダに乗って砂漠をゆく

首都デリー

首都デリーはインドで最も栄えた街だ。釘の専門店などの問屋街もあれば高級ショッピングモールもある。マクドナルドでマハラジャバーガーを食べるのもいいかもしれない。アクシャルダム寺院の噴水ショーは、涙が出るほど美しい。



▲色々な商店が立ち並ぶ



▲噴水ショー、アクシャルダム



▲地下鉄も走っている

文化の混合する街ムンバイ(ボンベイ)

ムンバイ、別名ボンベイには、インドと西洋の文化が混合した、堂々とした建物が立ち並ぶ。インドで有数のタージマハール・ホテルが誇らしげに海に向かい、数多くの石窟を持つエレファンタ島には毎日数多くの旅行者が訪れる。



▲センター駅の豪華な建物



▲立派な建築が並ぶ



▲エレファンタ島の猿

交通の要所ゴラクプル

交通の要所ゴラクプルは、まあ、冒頭に書いた通り、ひどいところだった。しかし、もしもう一度行けば、意見が変わることもあるかもしれない。二度と行く気はないけど。ただ、生々しいインドの姿、日本との文化の違いや貧富の差を叩き込むのには、こんなにふさわしい場所はないと思う。



▲ネパールとの国境



▲駅ではみんなで雑魚寝



▲電車を降りてホッとすると

他にも、今回自分が行かなかった、タージ・マハルのあるアーグラや、200年前に偶然発見された石窟寺院群のあるアジャンタ、チベット文化の色濃く残るラダック、インド最南端のカニヤクマリなど、訪れたい場所は山ほどある▼嫌なインド人もたくさんいるが、驚くほど親切な、それこそ日本人よりも親切なインド人との出会いもある。そういう人は、見返りを求めない▼あるインド人は、列車のくるホームがわからなくて困っている自分にベンチを譲り、わざわざ人のごった返した問合せ窓口に並んでまでホームの場所を確認してくれた。そしてこちらがお礼を言う暇もなく、風のようにその場を去ってしまった。恩着せがましきなど一切なかった▼こういう出会いが、旅の原動力となる。▼そして、そんな魅力的なインドの街々を旅する中で、目的がはっきりしていなかった自分の旅は、いつしか音楽旅行へと形を持って行った▼漁村プリーで行われた、あるロックフェスティバルに参加したことをきっかけに、いろいろな国のミュージシャンとセッション



▲ロックフェスティバルで演奏

（一緒に合わせて弾くこと）修行をするという目的ができたのだった。それで、それぞれの街でミュージシャンを探し、一緒に弾いてまわった▼日本にいるときは、せいぜい部屋の中でたまに引くくらいで、マンドリンを人に聞かせることはほぼ皆無^{かいむ}だった。が、宿の中で弾いていると、聞いた人が「良い音だね」「もっと弾いてよ」と言ってくれた。そんな風に言ってもらえるとは思っておらず、とても意外だった▼だんだん、毎日誰かの前で弾くようになった。いつしか、宿の外に出て弾くようになり、

ついには、ロックフェスに出演し、最終的にはある学校で25000人もの生徒を前に弾くことになった▼やったことのないことに対する恐怖はあったが、インドの、「何でもやってみればいいさ」という空気が、背中を押してくれた▼日本にいたままだったら、セッションの楽しさを知ることは恐らくなかったと思う。インドの空気の中に、マンドリンを持ち込んだからこそ、新たな世界が拓^{ひら}けた▼何が言いたいかって、マンドリンについて



▲2500人もの生徒たち

の自慢話じゃあない。大事なことは、これから書くことだ▼最初の方に書いたように、インドを旅行する中で、たくさんの嫌なことがあった。「いやいや、ありえないだろ」ということばかりだった。しかし、その「ありえない」って、何を根拠に「ありえない」なのか。ちっぽけの自分の常識じゃないのか。日本にいるときの、「こうすべき」「これが常識」「それはやっちゃいけない」ということは、所詮は、日本の常識でしかない。ここはインドだ▼インド人は、ありのままに接してくる。一般常識とか、そういう建前で接してくることはない。少なくとも、自分が接してきたインド人はそうだった▼親切な人は、「親切にすべき」だからそうしたんじゃない。そうしたかったからしたんだと思う▼騙^{だま}してこようとした人は、「騙してこい」と命令されたんじゃない。騙してで

も金儲けをしようと、自分自身で思ったんだろう▼「インド人、嘘つかない」というが、彼らは彼ら自身、自分自身に対しては嘘をつかないという意味では、この言葉は真実だ。自分の気持ちに正直なんだ▼そういう遠慮のない、インド人のむき出しのコミュニケーションに接して、自分の心はすり減った。言い方を変えれば、それは、自分の心もむき出しになっていく、ということでもあった▼例えば、自分は旅行中、「絶対に、誰からも、一円たりとも騙されないぞ！」という気持ちでいた。実際、自分は騙されなかった。でもその分、ずいぶん尖った態度でいたことが多かったし、騙そうとしてきたインド人と怒鳴りあいになったこともあった▼でもそれは、本当に自分がちょっとのお金もボツタケられたくなかったということではなくて、「騙されるのはダサい」という、誰かの価値観に踊らされていたんだと、今では思う。もちろん、騙されないのに越したことはない。しかし、数百円をボツタケられることに神経を尖らすよりは、もっと柔らかな態度で、相手をしっかり見てコミュニケーションをとってれば、仲良くなれた相手もいたかもしれない▼自分も「むき出し」になってみると、騙されないために自分の取っていた態度の傲慢さや、騙されることに対して本当はそんなに重要だと思っていないことなど、見えていなかったものが、見えてきた▼つまり、常識とか固定概念が剥がれ落ちた後に、「自分自身は、本当はどう思っているのか」が見えてきたということだ▼「誰かがこう言ったから」「こう教えられたから」という言い訳をする間もなく、生々しい自分自身との向かい合いが生まれてくる▼そうすると、見えていなかった本当の自分の気持ちが、見えてくるようになる▼「やりたいことを、正面からやってみる」ということ▼この大事さを、インドを旅した中で、つかんだ気がする。楽器で言えば、へたくそだと馬鹿にされようが、邪魔者扱いされようが、やってみなければやってみればいい、「一緒に弾こう」と言ってみればいい。ひょっとしたら、「良い音だね」と言ってもらえるかもしれない。スポーツだろうが、絵だろうが一緒だ▼言いたいことは、「知らないことに飛び込む勇気を持つと、世界が変わる」ということだ。世界が変わるというのは、言葉通り、「世界が変わる」という意味だ。今まで考えもしなかったことが起き、新たな未来が拓けていく▼30歳に近い自分は、インドを旅することでようやくそれに気づけた▼10代前半のみんながそれに気づけたら、どれだけ素晴らしい未来がひらけるんだろう！▼当然、無理にやることはない。本当はいやなのに、「やってみなきゃいけないんだ」で突っ込んでしまうのは本末転倒だ。「やりたくない」と思うのも君自身だから▼ただ、勇気を出すチャンスに巡り合ったら、自問自答してほしい。「本当はやりたいのに、怖がっているだけなのか」「本当に、やりたくないのか」▼もし、「本当はやりたいのに、怖がっているだけ」のなら、とにかく飛び込んでみるといい▼がむしゃらに突き進めば、きっと素敵な未来がそこには待っている。

◆ 行事予定

□ 9/3 2学期授業開始

□ 9/6 小5・小6首都圏模試，中3北辰テスト

□ 10/4 第5回中3北辰テスト(9/5～12までに受験料4600円を持ってきてください。今回の偏差値も入試相談会の貴重な資料となりますので必ず全員が受験してください)

【編集/加藤】